

山の存在と共に在るマタギの営み
ー移住者マタギの山での活動とマタギの身構えー

齊藤大介

キーワード：マタギ、移住者マタギ、メッシュワーク、身構え、共在感覚

要旨

本稿の目的は現代のマタギ、特に移住者マタギの山での活動がどのように行われているのかを明らかにし、そうした活動に見られるマタギが山と向き合う態度がどのようなもので、その基層にあるのはどのような感覚であるのかを分析することである。

本稿は序論と8章からなる。

序論では研究の背景や目的を述べる。本稿は他地域から阿仁に移り住みマタギをしている移住者マタギに着目し、その山での活動やそこで見られるマタギの山と向き合う態度、またその基層にある感覚を具体的な事例から考察するものである。本論では移住者マタギの参与観察から、これまでのマタギ研究におけるマタギの営みの個別的な検討だけでは捉えきれない、マタギの山での活動の総合性に着目し検討を行う。

第1章では本論の理論的な枠組みについて先行研究の検討を行う。まず、これまで行われてきたマタギ研究を概観したのち、マタギの狩猟採集活動を分析する際に本論が用いる、人類学者ティム・インゴルドの「メッシュワーク」の理論を提示する。また、マタギの山での営みに見られる山と向き合う態度を分析するにあたり、人類学者木村大治がアフリカの二つの社会でのフィールドワークから見出した「共在感覚」という概念を検討する。

第2章ではフィールドワークを行った秋田県阿仁地域や阿仁地域のマタギについて、現在の状況や活動について記述する。また、本研究で行ったフィールドワークについて記し、調査の概要を示す。

第3章から第7章ではフィールド調査での具体的な事例について検討する。

第3章では本論で主題的に検討する移住者マタギについて詳述する。フィールド調査では主に3人の移住者マタギの参与観察やインタビュー調査を行った。そこで、この3人の生活史的な検討を通して、現在の移住者マタギの生活や彼らがどのように阿仁に移住したのかということ明らかにする。

第4章では移住者マタギの山での活動に焦点を当てる。阿仁のマタギたちは山での活動が生業ではなくなった現代においても、狩猟や採集、釣りといった活動を一年中行っており、移住者マタギもベテランのマタギたちと同じように山での狩猟採集活動を年間通して行っている。移住者マタギの狩猟採集活動は、それぞれの活動が密接に結びついた総合的な営みであり、そうした移住者マタギの山での活動の事例を検討する。

第5章では移住者マタギの山での活動に見られる、山と向き合う態度がどのようなものであるかを分析する。マタギの山と向き合う態度を、釣りや採集活動、そして山でクマと対峙して行う「ショウブ」という狩猟の場面から検討し、マタギの山と向き合う態度や山の諸存在も含めた対他的な態度である「マタギの身構え」がどのようなものであるかを考察する。

第6章ではフィールド調査での事例から「猟場」という場所に着目し、移住者マタギの山での営みはどのようなものであるかを考察する。マタギの山での活動によって刻まれた線は、クマや山菜、キノコやイワナといった山の諸存在が織りなす生のラインと絡まり合っており、そうした現代の移住者マタギの狩猟採集活動の様相を人類学者ティム・インゴルドの「メッシュワーク」という概念やそこにおける「場所」の検討から分析する。

第7章では移住者マタギの狩猟採集活動における山の存在との偶発的な出会いや、クマを待つことの考察を通して、第5章で見た「マタギの身構え」の基層にあるものを「共在感覚」という視点から検討する。マタギがクマを待つことができるのは、この山にクマがいるということ、すなわち、ここにクマと共に在るのだという感覚があるからである。移住者マタギの身構えの基層にあるのは、山の諸存在と共に在るという感覚である。

第8章では移住者マタギの山での活動がどのように行われているのかを改めて整理し、そこで見られる「マタギの身構え」やその基層にあるものを考察し、結論を述べる。移住者マタギの山での営みとは狩猟や採集、釣りといった活動が渾然一体となった総合的な営みであり、そうした日々の活動によって阿仁の山に刻まれた移住者マタギの生のラインは、クマや山菜、キノコやイワナといった山の存在の生と絡まり合い、阿仁の山におけるメッシュワークを形作っている。移住者マタギの他に開かれた「マタギの身構え」は、山の存在と共に在ることに根ざしたものである。